『論理哲学論考』における「思考」と「自我」の規定

伊　藤　邦　武

序

ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(注1)を、我々の「思考」Gedankeについての哲学的分析という側面から捉えるならば、そこには二つの基本的特徴が認められる。第一には、『論考』はいわゆる認識論を心理学の哲学として斥け、事実としての人間の認識に関する探究を主題の外におく。これに対して『論考』は、「思考の限界」を、論理学を基礎にして明確化しようとするのである（cf.「序文」,4・1121,4・114,「論理に関するノート」序文(2)）。第二に、『論考』はこの思考の限界を、「言語の中」に見出そうとする（「序文」）。言語の限界とは、言語が無意義（Unsinn）となる限界である。『論考』の記述は、有意義性を基準として、我々の思考の限界づけを試みたものである。

本論では、ウィトゲンシュタインのこのような試みに現れた、「思考」という概念の基本的な規定を、『論考』のテキストに沿って検討し、あわせてこの思考の「主体」に関する分析を整理したいと考える。『論考』前半部には、「思考」という概念について、次の二つの基本的な言明がなされている。

3.「事実の論理的画像が、思考である」

4.「思考は有意義な命題である」

このうち命題3は、命題4以下における有意義な命題の本性に関する分析を導くための、予備的な規定であり、一方命題4から続く分析は、『論考』後半部における、判断命題（5・542−5・5423）や、思考主体、自我についての理論（5・631−5・641）を、基礎づけることになる。そこで始めにこれら二命題についてその意味するところを素描し、次いでこれらの基本的枠組みを足がかりとして、『論考』後半部の判断論と自我論を考察したいと考える。

一、事実の論理的画像としての思考

まず、『論考』1〜2・225 の画像説によって、「事実の画像」ならびに「論理的画像」について確認する。

周知のように、『論考』の存在論は論理的原子論である。世界の構成要素は「事実」Tatsacheであり、事実は「事態」Sachverhaltの存立と非存立とからなる。この事態は相互に独立な原子的事実であり、存立する事態の総体がこの世界である(3)。一方おのおのの事態は、諸「対象」Gegenstand の連関からなっている。対象は単純者であり、世界の「実体」Substanz を形成している。事態の中で諸対象は、ちょうど鎖の環のように互いに連結している（対象の結合には媒介項がない）。対象が諸事態の中に現れる可能性は、対象に内的に属し、それは対象の「形式」Form と呼ばれる。事態の中での対象の連関の様式が、事態の構造であり、その構造の可能性が、事態の形式である。

さて「我々は我々に対して事実の画像（Bild)を作る」（2・1）のであるが、画像と事実とは写像関係（abbildende Beziehung）に立っている。画像はそれ自身の内に要素の連関をもつ一つの事実であり、画像と事実との写像関係は、両者がその論理的多様性を同じくすることにより成立する。そして画像の内なる各要素が、写像する現実の側の対象に一対一に対応して、事実との並列関係を保つという意味で、この写像関係は画像に属しているとも言いうるのである（2・1513）。画像に写像された事態が、現実に存立するか否かは、画像の内では決定されていない（画像は正しくも正しくなくもありうる）（2・173,2・21）。従って個々の画像が現実の事態と共有するのは、その構造ではなく、構造の可能性すなわち形式である（いうまでもなく画像も一つの事実として構造をもち、その可能性としての形式をもつ）。画像がその形式を有することによって現実との写像関係に入るという意味で、画像の形式は、写像形式（Form der Abbildung）と呼ばれる。画像は現実の側にある事態とこの写像形式を共有するが、それは事態の構造が、画像が「示す」形式の一つの具体例となっているという意味である。事態の内なる対象は、現実に結合している様式とは別様にも連関「可能」であり、画像はその可能な結合を示している限りで、可能な事態の画像なのである。写像関係成立の条件は、画像と事態双方が論理的多様性を同じくすることにあるが、その基礎には、事態の中での諸対象の連関の可能性がある。「対象は不変なもの、存立するものである。その配置（Konfiguration）は、変化するもの、非恒存的なものである」（2・0271）。

さて「事実の画像」がこのようなものとして呈示された後に、「論理的画像」は、その写像形式が論理的形式である画像であると規定される。

2・171　画像は、画像がもつ形式をもっている現実のいずれをも写像することができる。空間的画像は全て空間的なものを写像でき、色彩的画像は全ての色彩的なものを写像できる。

2・18　およそ画像が現実を写像しうるために、いかなる形式のものであれ、現実と共有しなければならないのは、論理的形式、即ち現実の形式である。

2・181　写像形式が論理的形式であるとき、その画像は論理的画像である。

2・182　全ての画像は、いずれもまた論理的画像である。

これらの引用から明らかなように、論理的画像は、画像一般の中の一種類なのではない。その写像形式が「現実の形式」であるのは、現実の画像である限りで画像が有する本質である。画像の形式は、空間的形式であれ色彩的形式であれ、窮極的には、現実の形式であるということによって写像形式たりえている。画像の写像形式とは他ならぬ論理的形式である。このように考えると3において、思考が論理的画像であると規定されたのは、我々の作る諸像の内に、ある限定を設け、思考と非思考を区別したのではなく、その基礎を確定したものであると認められる。3に続く幾つかの命題（3・03,3・031, 3・032）との関係からも明らかなように、思考が論理的画像であるという3の言明は、その論拠が呈示されることもなく新しい帰結を導くこともないという意味で、何らの論証的価値ももたない言明である。しかしその意味するところは、我々が作る画像

が「現実の形式」を備えることによって画像たりえており、従ってこの形式の明晰化が、我々の思考の明晰化であり同時に世界の明晰化である、ということにある。これは、論理的原子論をその存在論とする『論考』の基礎をなす、方法論的な「自覚」の表現であると考えられる(4)。

二、有意義な命題

命題（Satz）とは、事実の論理的画像が、感性的に知覚可能な表現となったものである。あらゆる画像は、それぞれ知覚可能であるが、命題はその論理的形式を露わにした画像であり、画像のもつ写像関係を端的に示すことによって、その意義（Sinn）の確定を可能にした画像である。『論考』の言語観は、この命題の総体を言語（Sprache）と同一視する（4.001）。命題において思考が表現されるというのは、命題の外に「思考」という存在が認められているということを意味してはいない。命題の知覚可能な側面は、命題記号であり、これが事実との写像関係に立ち、我々に使用される時に限って、命題は思考と呼ばれるのである。『論考』において思考作用が見出されるのは、この言語「使用」という場においてである。

まず、命題中の要素は「名」と呼ばれるが、これは対象を「意味する」（3.203）。対象は名の意味である。我々は対象を名ざし（nennen）、これを記号（Zeichen）によって代表させる（3.221）。記号による対象の名ざしは命題成立の条件であり、また記号の意味の知悉が命題理解の条件である（4.0312, 3.263）。これに対して命題は、事実を写像し、仮にそれが真であるとすれば事実がどのようであるかを我々に示すものである。命題の意義とは、この、それが真であるとき事実はどうなっているか、である。我々は意義を表現する可能性をもった（すなわち論理的形式をもった）、感性的に知覚可能な記号である命題記号（Satzzeichen）へと、現実の事態を「射影する」（3.11−3.13）。この射影の方法とは、記号が可能態として有する意義を、我々が「思考する」denken ことである。その意義が思考されているという限りで、命題記号とは命題そのものであり、このとき「命題は意義を持つ」（3.3）と言われる。このように「思考」とは、「適用され、思考された命題記号」すなわち「有意義な命題」sinvoller Satzである。有意義命題＝思考はその意義を示し（4.022）、我々はその命題の意義を理解する（4.021）。有意義な命題は意義を示して、我々に可能的状況（Sachlage）を描出し、伝達する（darstellen, mitteilen）。命題は名ではないので、事態を「指し示す」ことはない。命題は「論理的」画像として、その写像形式を露呈し（命題はその形式を「示す」zeigen）、それによってそれが真である（正しい）とき、事実となる状況を記述する（beschreiben）のである（4.023）。

さて、このような『論考』における思考＝有意義命題の説に関して、次の二点が注意される。第一には、上の説明は我々の思考作用のありかを、論理的画像となるべき記号がその使用を通じて命題として成立するというところに見出したことによって、我々の思考作用の構想的機能に、一つの分析を加えたことになっているという点である。『論考』は我々の思考のダイナミズムを、「記号（名）の内に表現されていないものを、その記号の適用が示す。記号が呑み込んでいるものを、その記号の適用が言表する（aussprechen）」（3.262）という側面から明確化している。

「命題は、（古い表現を以って）新たな意義を伝達できる。このことは命題の本質に属している」（4・027, 4・03）というのが、『論考』の命題論の一つの基本原理なのである。

第二に、我々の思考を有意義な命題に限るということは、その真偽が現実との「比較」によって確定される（2・23）命題のみを思考と認め、命題記号の内でア・プリオリに真偽が確定しているものは思考とは認めないということである（2・225）[5]。この説は、我々の認識作用の成立を、次のような二つの契機から説明することを意味している。すなわち我々の認識は、現実の構造の可能性である論理的形式を記号を用いて限定する思考作用（＝可能的状況の記述）と、これの現実的存立を確認する経験的照合の作業からなる。世界を射影する言語行為は、記号による現実の形式の限定であり、認識は、更にその先にある経験をまって成立する。「全要素命題の指摘に加えて、その内のどれが真でありどれが偽であるかを指摘することによって、世界は完全に記述される」（4・26）。このように『論考』は、我々の思考を経験的知識の形式を規定するものとしてのみ認め、我々により語りうるものを、「自然科学の諸命題」（6・53）のみに限定するのである。

三、思考の主体、自我

さて、思考作用を言語使用ということと相即的に捉えるこのような理論は、例えば我々の認識作用の内に、悟性による観念の把握と意志によるこの観念の真であることの承認という二つの契機を認めたデカルト説のような認識論に対して、このような精神の内での知解作用と判断作用の区別を排棄するのみならず、そもそも認識作用の主体としての精神的な実体の措定を許容しない立場をとる。『論考』ではこの認識主体および認識内容の存在論上の身分に関する問題を、まず、「Aはpであると信ずる」という命題形式が、命題論の原則に則ってどのように分析しうるのかという問題から考察する。

5・54　一般的命題形式においては、命題は真理演算の基底としてのみ、他の命題の内に現れる。

5・541　一見したところでは、これとは別のしかたで命題が他の命題中に現れるようにも思われる。「Aはpという事情であると信じている」「Aはpと考える」等々の、心理学におけるある命題形式の場合、特にそのように思われる。すなわち表層的には、この場合、pと対象Aとが一種の関係に立っているように見えるのである。

5・542　しかし、「Aはpであると信ずる」「Aはpと考える」「Aはpと語る」が、「″p″はpと語る」という形式のものであることは明らかである。そしてここで問題となっているのは、一つの事実と一つの対象との並列関係（Zuordnung）ではなくて、事実の内なる諸対象の並列関係によって成立する諸事実相互の並列関係である。

5・5421　このことはまた、今日の皮相な心理学が考える魂、主体といったものが、不合理な非実在物（Unding）であることも示している。すなわち、合成された魂はもはや魂ではないであろう。

さてここで冒頭に確認されているのは、『論考』の命題論の根本原則である、外延性の原理（principle of extentionality）である。この原理に従えば、あらゆる命題はそれを構成する諸要素命題の真理函数（Wahrheitsfunktion）である（5）。要素命題とは世界の単位である原子的事実＝事態を写像する論理的画像であり、あらゆる複合命題はこの要素命題に幾つかの論理的演算を加えた結果である。（『論考』では論理的演算として、否定と連言を考える（5.5））。すべての真理函数すなわち複合命題は、要素命題に有限個の真理演算を継続的にほどこした結果であるから、その複合命題中の部分をなしている命題は、それに演算が適用されて結果としての複合命題が成立することになるべき演算の「基底」Basisである。（例えば命題〝～p〟は〝～～p〟の基底である）。このようにあらゆる命題中の命題は、演算の結果としての命題を形成する基底であり、真理函数の項でなければならないのであるが、心理的事態を描写しているように見える「Aはpと判断する」というような文にあっては、命題pは、この文全体を函数と考えた場合の項とはなってはいない。ウィトゲンシュタインはここに、心理的事態（あるいは志向的事態）の表現がもつ混乱を指摘するのである。

実際にはここで『論考』は、「Aはpと判断する」というような心理的事態の表現を、その外延性の原理に則った概念表記法へと還元する方途を示してはいない。上の引用から明らかなように、ウィトゲンシュタインは外延性の原理の徹底という問題を、判断を対象（判断主体）と命題との関係として捉える判断論の批判へと変形している。（ここでの批判の直接の対象は、ラッセルのmulti－object theory of judgment）である(6)）。このことは、心理的事態の表現が外延性の原理に則った本来の命題ではないということから、すなわち心理的事態そのものが「世界」を構成する「事態」には含まれぬものであるという主張を含んだものと考えることが可能である。5.542 において、「Aはpと信ずる　考える、等々」は「〝p〟はpと語る」と等しいと断定されている。ここでの「〝p〟はpと語る」とは、先に見た有意義な命題の描出作用のことである。すなわち命題記号〝p〟が、pという可能的状況を描出し、伝達することである。既に述べたように、命題記号へと世界を射影する我々の思考作用によって、記号は有意義な命題となり、可能的状況を描出する。5.542 は、我々の心理的事態を、世界と命題（論理的画像）の写像関係へと還元しようという主張である。いうまでもなくこの画像の写像関係そのものは、命題によって描出される事態ではない。かくして『論考』における世界の部分画像説としての言語観からは、心理的事態は「事態」ではないことになる。

思考主体、判断主体という「対象」を想定する認識論への批判も、心理的事態の写像関係への還元ということから直ちに理解される。何らかの「意義」Sinn の成立を、世界と論理的画像との写像関係、すなわち事態の内なる対象の連結と画像の連結の並列ということに認めるならば、そこには複合者のみが関与しているのであって、単純者たる「実体」としての判断主体、認識主体は見出されない。可能的状況に対してある実体が写像関係に立つことは不条理である。それゆえ世界の実体たる対象の内に思考の主体は含まれず、すなわち存在しないのである(7)。

実体としての自我は以上のように否定される。しかしながらこのような画像論からする意義の

成立においても、これを思考作用と等置する以上、表象作用およびそれの基体について問題がすべて解消したとは言い難い。むしろ上の言語画像論は、世界を描出する命題そのものを、何らかの表象作用の基体と捉える観点に立つものではないかと疑うこともできよう。すなわち「Aはpと語る」を「″p″はpと語る」と還元したとき、この「″p″はpと語る」という文そのものは本来の「命題」ではなく、世界の自己写像を表現したいわば超越論的命題(「梯子」文(6・54))であるが、ここでは文の主語たる″p″がいわば描出作用の主体と見做されていないであろうか。

ウィトゲンシュタインは、このような奇妙な超越論的観点からの主体を容認することはない。しかし別の観点から、端的に超越論的な自我そのものが問題視しうることを認める。それは教説(Lehre)ではなく活動(Tätigkeit)である哲学のうちに(4・112)、有意義なしかたで現れるという。「哲学において非心理学的に自我(Ich)を論じうるということの意義は、現実に存在する。自我は、「世界は私の世界である」ということを通じて、哲学の中に入ってくる。哲学的自我は、人間、人間の身体、心理学が扱う人間の魂などではない。それは形而上学的主体であり、世界の部分ではなく、世界の限界である」(5・641)。すなわち、哲学的自我は唯我論(「世界は私の世界である」)の問題として問題視しうる。自我の存在解釈は、唯我論の解明にかかっている。

5・62　唯我論が言おうとする(meinen)することは正しいが、それは語られようがないことである。それは自らを示す。世界が私の世界であることは、言語の(私が理解する唯一の言語の)限界が私の世界の限界を意味する〔die Grenzen *der* Sprache (der Sprache, die allein ich verstehe) die Grenzen *meiner* Welt bedeuten〕ということの内に、自らを示している。

この命題に現れた「私」は、形而上学的主体(metaphysishes Subjekt)であって、経験的人間としての自我とは見做されていない。ここでは、この形而上学主体をその主体の使用する(理解する)言語の全体と同一視し、この言語の限界と世界の限界が等しいということこそ、唯我論のいう世界が私の世界であるということの意味である、と示唆している。形而上学的主体がその理解する言語全体と同一視されるというのは、「我々が思考しえぬことを我々は思考しえない。従って我々が思考しえぬことを我々は語ることもできない」(5・61)ということ、すなわち思考一般を担う形而上学的主体の限界は言語の限界として理解されるということである。一方、言語の限界が世界の限界であるということは、論理的画像=命題の総体としての言語の内に、世界の限界を越え世界に先立ってア・プリオリに成立するものはなく、反対にまた、論理が達しえない世界は、「それがどのようなものであるか語ることさえできない」(3・031)ということである。

5・552　論理を理解するために必要な「経験」とは、何かがかくかくの事情にあるという経験ではなく、何かがあるという経験である。(……)論理は何かがかくかくであるという経験のいずれよりも前にある。論理は「いかに」wieの前にはあるが、「何が」

was の前にはない。

5.5561　経験的実在（empirische Realität）は対象の総体によって限界づけられる。限界はまた、要素命題の総体において示される。

5.61　論理は世界をみたす。世界の限界は論理の限界でもある。

このように『論考』の考える唯我論は、思考一般を担う形而上学的主体の言語の限界を、世界の限界と同一視するという説である（5.6）。それは通常理解されるような意識としての自我以外の存在を否認する説を意味するのではなく、いわんや自我の世界における他我了解の不可能を主張する説を意味するのでもない(8)。この点では、『論考』の理解する唯我論そのものは、これまでに確認された言語画像説の理論的枠組みに沿ったものである。しかしながら、ここにおいて現れた「私」という人称代名詞はどのようなものであり、またこのような人称の区別を含む唯我論の「正しさ」とは何かは、以上の言語御の内に求めることはできない。ここに、『論考』の自我論の最後の論点がある。

まず上のような唯我論解釈からは、形而上学的主体、哲学的自我の存在をめぐって、次の帰結が導かれる。すなわち、このような自我はいかなる意味においても世界のなかに見出されることはないので、それを存在論の内において一つの存在と認めることは、やはりできないということである。自我は一つの対象（実体）として存在しないばかりか、例えば意識の流れのような事態として世界の内につきとめることもできない。「いかなる命題も、自己自身について言明することはできない。命題記号はそれ自身に含まれえないからである」（3.332）という命題論の原則が、形而上学的主体を命題の総体＝言語の限界と捉えるゆえに、ここでも適用される。かくして厳密につきつめられた唯我論は、純粋な実在論に合致する。唯我論の哲学的解明を通じて、「唯我論における自我は、延長のない点にまで収縮し、そして自我に相関した実在（Realität）が残る」（5.64）のである。

さて、世界の内に哲学的自我が現れないということからは、世界の内なる一切の事態がア・ポステリオリなものであることが保証されたと考えることができる。ウィトゲンシュタインはこれを、世界の限界の偶然性と解し、更にこの世界の限界の偶然性に、世界の限界と等置される形而上学的主体の「意図」Wollen を結びつけるのである。

6.43　善なる意図あるいは悪なる意図が世界を変えるならば、その意図は世界の限界のみを変えるのであり、諸事実すなわち言語によって表現しうることを変えることはできない。つまりこのとき世界は全く別の世界にならなければならない。世界はいわば全体として増大縮小しなければならない。幸福な人の世界は不幸な人の世界とは別のものである。

ここにおいて、『論考』における形而上学的主体は、世界の限界として、世界全体の射影と世界全体の意図という二つの側面を附与されていることが見てとれる。しかも、この自我の人称的区別のありかは、世界全体を意図する主体という側面に見出されている。結局、『論考』において唯我論に現われる自我は、「意識」としての自我ではなく、善悪を意図する倫理的主体として

の自我である。しかしながらいうまでもなく、この自我の意図の側面は、上に見てきた『論考』の存在論および命題論からは説明できない。自我は世界の内なる自我ではないので、その意図を行為に結びつけて経験の場で解明することはできないし、また、世界の限界の大小についても、これを例えば実在性（完全性）の大小に結びつけて説くような形而上学を廃棄している以上、その意図の善悪のメルクマールは不明である(9)。したがって形而上学的主体の意図という説は、少くとも『論考』の基本的原則からは説明できないという意味で、独断的である。『論考』の超越論的唯我論(10)の「正しさ」は、それ自身が指摘するように、あくまでも説明不可能なものにとどまっていることになる。

（註）

（註 1) Ludwig Wittgenstein, Tractatus logico-philosophicus. (Wittgenstein, *Schriften* 1., Frankfurt am Main, 1969) 引用はすべてテキストに付された番号をもってする。

(2) Wittgenstein, *Schriften* 1. p. 186

(3) 「事実」と「事態」との関係は、『論考』において必ずしも明確ではない（2 及び 2.06 対照）。ここではラッセルの「序文」に従って、事態を事実の単位すなわち原子的事実と解釈する。cf. Max Black, *Companion to W's Tractatus*, London, 1964, p. 39 ff.

(4) ここでは画像説の文脈での、『論考』の論理観を呈示したが、『論考』の論理説にはさらに、論理的画像は論理的空間全体の内のある位置（論理的位置）を占めるという原則がある。論理的位置とは、幾何学的位置と同様、ものがそこに存在しうる可能性を指すが、その位置はこれを囲む論理的足場によって支えられている（3.411, 3.42)。（このような論理学の体系性は、具体的には、命題間の論理演算による外延的連結として、5.442, 5.46 等に説明される）。従って、一つの論理的画像の成立は、すなわち一つの論理的位置の指定として、全論理的空間の指定を導くことになる。このように『論考』の存在論は、各事態を相互に独立なものと認めながら、その形式は全論理空間によって規定されたものと捉えている。それ故、思考は世界の部分画像であるが、その論理性を明晰化しきった限りでは、永遠の相の下での世界全体の直観（6.45）を基礎にもつ、ということにもなる。この点は、本論末の論点と関連する。

(5) 『論考』はア・プリオリに真なる思考に言及するが（3.04, 3.05)、それを思考の内に容認しない。『論考』ではいわゆるア・プリオリな分析判断を、「同語反復」Tautologie と「矛盾」Kontradiktion の問題として考察する（4.46－4.4661)。同語反復とは、それを構成する要素命題の真理可能性がいかなるものであっても真となる複合命題（記号）であり、矛盾とはいかなる真理可能性に対しても偽となる複合命題（記号）である。これらにあっても、その内で諸記号は互いに結合しているゆえに、これらは記号体系に属するが、同語反復は可能的状況の一切を許容し（現実に対して全論理空間をあてがう）、矛盾はいかなる可能的状況をも許容しない（論理空間中のどの位置も指定し

ない）。それゆえこれらは現実に対していかなる措出関係にも立っていない命題記号であり、従って思考ではない。

(6) 例えば、Russell, B; "On the Nature of Truth and Falsehood" in *Philosophical Essays*, London, p 180. また、"Lectures on Logical Atomism" in *Logic and Knowledge*, London, p 226.

(7) Cf.「思考し表象する主体は存在しない」（5.631）。上の写像関係による説明とは異って、5.631においては、思考主体の存在は、それが経験の内に見出されることがないというヒューム説と同様の理由で否定されている。すなわちひとが『私が見出した世界』という書物を書くとき、そこには「主体」が論じられることはないであろうという。

(8) この点で、「私の言語」を「私のみが理解する言語」と捉え、『論考』の唯我論を、言語による伝達の不可能性、言語の私秘性の説と捉える見方（例えば、J. Weinberg, An Examination of Logical Positivism, London, p. 205 f）は妥当ではないと思われる。Cf. Jaakko Hintikka, "On Wittgenstein's Solipsism" in *Essays on W's Tractatus*, I. M. Copi and R. W. Beard (eds.), London, 1966, p. 157 ff.

(9) 『日記』1916年7月30日 ―「幸福で調和的な生の客観的なメルクマールとは何か。記述しうるようなメルクマールが存在しえないこともまた明らかである。このメルクマールは物理的なものではありえず、形而上学的、超越的なもの（ein metaphysisches, ein transcendentes）でしかありえない」。Wittgenstein, *Schriften* 1. p. 171.

(10) ハッカーは、『論考』の立場を、「経験的実在論にして超越論的唯我論」と規定している。P. M. S. Hacker, *Insight and Illusion, Wittgenstein on Philosophy and the Metaphysics of Experience*, Oxford, 1972, p. 81.

〔哲学博士課程修了〕